

東邦大学のルーツをたどる

理事長 炭山 嘉伸

第12回 豊先生の夢のあとさき

前回は、学園の運営をめぐる嵐が断続的に到来するなか、豊先生が死去されたこととお話しました。もちろん、1957(昭和32)年、理事長・学長職を退き、「顧問」という立場に落ちついた豊先生も、学園の嵐をただ遠くから眺めていたわけではありません。ひとたび問題が起ると、痛風で痛む足を引きずりながら登校し、若い教員の部屋を訪れて意見を求めたといえます。もちろん、本学にとって戦後の20年間は、嵐の20年としてあったばかりではありません。未来に向けての建設と発展の20年でもありました。

■ 伸びゆく学園

1950年、新制大学として新たな一歩を踏み出した本学は、その後も着実な歩みを進め、53年3月には薬学部、そして翌54年3月には医学部と理学部の第1回卒業生を送り出しました。大森病院の復興もめざましく、病棟も次々と増築されて、1947年の再建当時は外来患者数が1日平均110人だったものが、創立30周年を迎えた1955年には578人に達しました。同年、習志野キャンパスの土地も払い下げが決まり、10月には30周年を祝う諸行事が3日間をかけて華々しく行われました。



薬学部第1回卒業生(1953年3月)
大学昇格・男女共学後の初めての卒業生

また、1952年の付属東邦高等学校開校に次いで、1957年には、駒場東邦中学校・高等学校が開校。同年には、薬学部への入学志望者急増に応えるためかねてから懸案だった定員増が認可となり、1学年80名から120名へと大幅な増員が実現しました。さらにこの年には、医学部で学位認定ができることとなり、1959年、大学院医学研究科が設置されました。1962年に医学部も定員40名から60名への増員が認可されています。

豊先生の亡くなった1964年には、念願だった大森病院に新病棟、病院1号館が竣工し、大橋病院の1期工事分も完成を見ました。両病院とも、当時の最先端機能を集め、大学の付属病院の名にふさわしいものです。

私立の医科大学にとって病院は、教育・研究の拡充という意味においても、経済的基盤を確固たるものにするという意味においても、大変に重要な位置を占めています。私が理事長職についたとき真っ先に手掛けたのも、病院機能の拡充でした。病院機能を向上させ、多くの患者さんが集まるようになれば、教育・研究機能も向上させることができ、さらにより医療が提供できて、その結果、社会への貢献度も上がると信じるからです。

創立40周年を迎えた1965年には、学生の厚生施設として「軽井沢山荘」が誕生しました。この施設は、(株)星野温泉(現在の(株)星野リゾート)の社長夫人・星野禮子さんが本学の医学科1回生だったことから、その夫君・嘉助社長のご厚意を受け、敷地約6,600㎡のうち半分を無償で、また残りも低廉な価格で譲渡していただいたことから実現したものです。また、建物の建設にあたっては、在学生と同窓会から多大な援助をいただきました。

■ 豊先生の描いた夢

ところで、『東邦大学三十年史』には、当時、豊先生が夢として描いていた大学の姿が、著者・加藤恭亮氏によるインタビューという形で収録されています。豊先生は、「何しろ僕はこの三十年間、学校のことばかりを現にも夢にも考え続け見続けて、とにも角にも今日までやつて来たし、今も今と新しい夢を沢山見ているんだから、語るべき夢は実に多い」として、次のように述べています。

「(医学部)基礎教室第二号館鉄筋コンクリート四階建を新築し、その次の年には、外来診療所を現在の二倍余の鉄筋コンクリート建てとし、その次の年には外科病棟として鉄筋コンクリート五階建を新築し、手術室は全部五階に設ける。之等の設計図は僕自身の手で最近出来上っている。之が終わったら現在の第一・第二・第三病棟等を全部鉄筋コンクリート三階建に改築して入院病床数を千余にし、内容も極力改善するつもりである。

これだけ出来た上で、附属病院分院をなるべく速く適当な所に建てたいと思う。

薬学部及び理学部のための図書館建築を急ぎ、生物学教室をも至急改築のことゝ致し度い。その他の施設も整備充実を急ぐつもりである。尚、薬理両学部とも鉄筋コンクリート本建築にすることを真剣に考慮中であるが、敷地を都内に移すかどうか問題だ。

これだけの施設を整えれば、施設に於ては他の大学を優に凌駕出来るものと確信する」(「理事長(学長)の夢」)。

『東邦大学三十年史』が刊行されたのは、1955年10月のことですから、それ以前に実に綿密な建設計画が豊先生の中で出来上がっていたということになります。かつ、これらの計画

は、その後の10年間にほぼ実現されることとなりました。『東邦大学四十年史』の「八十八翁の遠大な計画」と題する同様のインタビュー企画では、

「わたしは、八年前に第一線から退いて顧問の閑職に就き、こまかいことには一切口を出さないことにしているのですが、長期計画の大綱だけは理事者にはっきり示して、この線に沿って、理事者が施設の拡張や、人事行政その他の具体的な運営をするように、期待しているのです」

として、創立以来の理念である「医薬理併進」を基本に、具体的には、三学部共通の研究所をつくることや、人口増加が著しい習志野方面に三番目の付属病院をつくることなどを上げています。付属佐倉病院はやや遅れて1991年の開院となりましたが、現役を退いた88歳とは思えない的確な発案に、さすがに事業の天才と誰もが認める豊先生だと思わずにはいられません。



佐倉病院

■ 晩年の豊先生

とにかく豊先生の頭からは生涯、学校のことが離れることがありませんでした。次第の坦氏は、こんなエピソードを紹介しています。1970(昭和45)年3月、坦氏は昔のことを少し書いたものなどをもって、豊先生の自宅を訪ねると、喜んで音読し「中々よく覚えているなア」と上機嫌の様子だったそうです。坦氏は、その時、豊先生がふともらした「東邦大学も今後、色々のこともあろうが、失くなることは無かろう」という一言が気になってしかたがなかったそうです。豊先生が大橋病院に入院したのはその後まもなくのことでした。そして、1972年7月29日、豊先生は94歳で帰らぬ人となったのです。

8月8日に行われた大学葬で、浅田敏雄名誉学長(当時は学長代行)は、次のような弔詞を述べています。

「学園の流れの中で、時に風浪がおこり、左右にゆれ動くことがありましたが、何人の努力といえども未だ額田豊先生の建学の布石の掌中を飛び廻っていたに過ぎなかったことをしみじみ感ぜざるを得ません」

確かに、私たちは、豊先生・晋先生が夢見、そして築かれた足跡の上を歩いているにすぎないのかもしれませんが。先に上げた『東邦大学三十年史』の「理事長(学長)の夢」は、次のように

結ばれています。

「どの学部の職員でも学生でも、むやみに僕を敬して遠ざけたり、遠慮気兼ねをしったりしないで、どしどしやつて来て、塩煎餅でもかじりながら大いに語り合つて、お互に『夢』を研究し合い、いゝ夢をつくり上げ、そしてその夢を実現にまで持つて行くように心を合わせ力を合わせて努力したいものと思う。

之を要するに、内容外観ともに極めて優秀で特色のあるいゝ大学を造り上げたい——これこそは僕の『夢』の究竟の狙い所である」

豊先生・晋先生亡き今、直に「夢」を語り合うことはできませんが、せめて両先生の残されたものとりかえし対話をすることで、よりよい学園の未来図が描ければ幸いであると思ひます。



東邦大学入学式後のパーティーにて(1957年4月)

【参考文献】

- 浅田 敏雄 「創立者・額田兄弟を偲ぶ」『学園だより』
東邦大学大学事務室 1985年6月
- 見学 玄編 『東邦大学五十年史』
東邦大学創立50周年記念事業委員会 1978年
- 加藤 恭亮 『東邦大学三十年史』学校法人東邦大学 1955年
- 加藤 恭亮 『東邦大学四十年史』学校法人東邦大学 1965年
- 額田 坦 「創立者を憶う(8)」『学園だより』
東邦大学大学事務室 1975年6月

創立90周年に向けて、「東邦大学のルーツをたどる」を連載してきました。このコーナーでは、東邦大学に関する資料の提供をお願いし、多くの方々に協力をいただきました。ここに厚くお礼申し上げます。連載は終了いたしますが、資料室では資料の収集を継続的に行っております。卒業生や関係者の方で情報や資料をお持ちの方は、ご連絡くださいますようお願いいたします。

【額田記念東邦大学資料室】

Tel: 03-5763-6697 / E-mail: archives@toho-u.ac.jp
※お問い合わせフォーム <http://www.archives.toho-u.ac.jp/>